

卒業生支援への一考察 —川崎市立看護短期大学卒業生の学習ニーズ、役割受容度の実態調査から—

吉村恵美子¹⁾ 青柳美秀子¹⁾ 美田誠二¹⁾ 菊地珠緒¹⁾ 島田祥子¹⁾

要 旨

川崎市立看護短期大学の卒業生 670 名に対し、学習ニーズと役割受容度に関する調査を実施し 126 名から回答を得た。その結果、学習環境としての施設の開放に関するニーズが高く、図書館の利用の拡大と利用手続きの簡素化を求めるものが多かった。「研修」については「カウンセリング」、「看護研究支援」へのニーズが高かった。また少数ではあるが、再就職等の支援へのニーズも挙げられていた。「役割受容度」を測定したところ、「役割有能感」は低値を示したが、自分の生き方や役割に対して比較的肯定的であり、満足しているという傾向が伺えた。

これらの学習ニーズや役割受容度調査から、設備利用・研修など本学卒業生への支援内容が示され、また、在学生、卒業生、教員等との双方向性の交流の重要性が示唆された。

キーワード：卒業生、学習ニーズ、役割受容度、キャリア発達、生涯教育

はじめに

川崎市立看護短期大学（以下、本学）の第 1 期生が卒業して 10 年が経過し、卒業生（平成 9 年度～平成 19 年度）は 819 名となった。同窓会が発足して約 10 年になり、大学祭においては学習会の開催、模擬店の出店などの参画を得られ、徐々に活動も活性化している。本学では同窓会の代表を後援会の理事として位置づけ、本学の運営に参画する体制を整えている。また本学側として卒業生のキャリア発達を支援し続けることは使命であると同時に本学の発展にとって大変重要であると考えている。卒業生は新人看護師から卒業後 10 年の中堅の看護師、あるいは保健師、助産師、養護教諭、学生、主婦等一人ひとりが異なった多様なキャリアを築いている。そのような状況の中で自己の仕事上あるいは生活上の果たすべき役割をどのように認識し、発展させているのかを知ることは重要である。そこで、卒業生にアンケート調査を実施し、卒業生の役割に対する認識や満足感および学習ニーズを知り、本学卒業生への支援対策の一助としたい。

I. 研究の目的

卒業生の学習ニーズおよび役割受容度について調査することによって、卒業生に対する本学の支援の方向性を探る。

II. 用語の操作的定義

役割受容度：本研究において役割受容度とは、三川¹⁾による「自分の人生における役割に対する満足感、あるいはその役割に対する達成感および有能感の程度」とした。

III. 研究方法

1. 調査対象者：平成 9 年度から平成 19 年度までの卒業生 819 名のうち、送付先が明確な 670 名。
2. 調査方法：質問紙調査法、全対象者に自作および「役割受容尺度」に関する質問用紙を郵送し回収した。
3. 調査期間
平成 21 年 2 月 9 日～3 月 16 日
4. 調査内容
 - 1) 卒業後の進学、卒後教育機関等の受講状況
 - 2) 本学の利用状況
 - 3) 今後本学に望む支援内容
 - 4) 役割受容度：三川が開発した「役割受容尺度」²⁾

1) 川崎市立看護短期大学

を用い、役割受容度を測定。なお本尺度を用いるにあたり著者より使用の了解を得て実施した。役割受容尺度は「役割満足」、「役割評価」、「役割有能感」、「役割達成」の4つの下位尺度で27項目から構成されている。

5. 分析方法

各項目は単純集計した。役割受容尺度の4尺度、年齢、卒業後経過年数に関しては相関係数（Spearman）を抽出した。分析は統計ソフト SPSS13.0J for Windows を用いた。

IV. 倫理的配慮

研究主旨を説明し、同意した対象者に実施した。同窓会の名簿を使用するため、個人情報保護の観点から学校側と同窓会と協議し、同窓会の総会においてその主旨を説明し、了解を得た。名簿の使用に関しては、本調査に同窓会会長名でその経過について説明し同意を得る手続きを踏んで調査を実施した。調査の目的、および回答は無記名であること、個人が特定されないよう統計的に処理することを文書に明記し、回答をもって同意とみなした。

表1 対象者の年齢構成

n=126		
年齢	(人)	(%)
20～24才	27	21.4
25～29	51	40.5
30～34	42	33.3
34～37	5	4.0
NA	1	0.8

表2 対象者の卒業経過年数

n=126				
卒業年度	卒業後経過年数	(人)	(%)	
平成	10	12	10	7.9
	11	11	12	9.5
	12	10	9	7.1
	13	9	15	11.9
	14	8	6	4.8
	15	7	13	10.3
	16	6	7	5.6
	17	5	8	6.3
	18	4	12	9.5
	19	3	13	10.3
	20	2	7	5.6
	21	1	2	1.6
	NA		12	9.5

V. 研究結果

1. 対象の概要

卒業生 819 名のうち、送付先が明らかな 670 名にアンケートを送付し、126 名（回収率 18.8%）から回答を得た。有効回答は 100% であった。男性は全体の 7.9% で、女性は 92.1% であった。

対象の年齢は 22 才から 37 才までで、平均年齢は 28.0 才、年齢構成は表 1 のとおりであった。卒業後経過年数は平均して 7.0 年であった。詳細は表 2 に示した。職業は看護師が最も多く全体の 60% を超えていた。詳細は表 3 に示した。

また、本学へのアクセスに関しては、最寄り駅である「川崎駅」から現在の住まいまでの所要時間は、約 4 割が 60 分以内、6 割は 60 分以上であった。詳細は表 4 のとおりであった。

表3 対象者の職業構成

n=126		
職種	人	(%)
看護師	79	62.7
保健師	12	9.5
助産師	6	4.8
養護教諭	5	4.0
専業主婦	13	10.3
学生	6	4.8
無職	2	1.6
その他	3	2.4

表4 川崎駅から住まいまでの所要時間

n=126		
所要時間	(人)	(%)
30分以内	15	11.9
30～60分以内	41	32.5
60～120分以内	36	28.6
120分以上	34	27.0

2. 卒業後の学習状況

本学卒業後更に進学し、何らかの卒後教育を受けていた者は44名であり、全体の34.9%であった。内訳は表5のとおりであった。

表5 卒後教育状況

n=44		
教育機関	(人)	(%)
専攻科	18	40.9
①保健師専攻	(11)	(25.0)
②助産師専攻	(4)	(9.1)
③養護教諭専攻	(1)	(2.3)
編入	17	38.6
大学院修士課程	3	6.8
大学院博士課程	1	2.3
研修機関	1	2.3
その他	4	9.1

3. 本学の利用状況

卒業後に本学の施設や研修等の参加状況について調査したところ、最も多いのは施設の利用で44.4%であり、利用していない者は41.3%であった。詳細は表6のとおりであった。また、ホームページの利用状況は表7のとおり、「時々利用している」が全体の38.1%で、「利用したことがない」が61.9%であった。

表6 本学の利用状況

n=126		
項 目	(人)	(%)
施設を利用	56	44.4
①図書館	(46)	(36.5)
②情報処理室	(7)	(5.6)
③体育館・グラウンド	(1)	(0.8)
④その他	(2)	(1.6)
行事に参加	32	25.4
①同窓会	(14)	(11.1)
②学生祭	(15)	(11.9)
③公開講座	(3)	(2.4)
④研修会	(0)	(0.0)
教員に相談	30	23.8
①訪問	(19)	(15.1)
②電話	(5)	(4.0)
③メール	(5)	(4.0)
④その他	(1)	(0.8)
証明書	19	15.1
研究指導を受けた	9	7.1
その他	4	3.2
利用無し	52	41.3
(複数回答)		

表7 ホームページ利用状況

n=126		
	(人)	(%)
よく利用	0	0
時々利用	48	38.1
利用しない	78	61.9

4. 本学に望む支援

卒業生に対する支援に対しての要望を聞いたところ、施設利用の促進が44.4%と最も多く、その多くは図書館に関するものであった。図書館の利用時間の延長、手続きの簡素化、文献の取り寄せ等のサービスの拡大に関するもので詳細は表8、表9のとおりであった。

また研修に関しては45名(35.7%)が必要としており、その内容で最も多かったのが、表10のとおり、カウンセリングに関するもので34.0%であった。また看護研究、事例研究、情報処理はいずれも内容は研究に関するものであり、合計すると40.0%となり、研究指導に関するニーズが高かった。ホームページ掲載内容に対する要望は表11のとおりで教員の情報や本学の動向が上位を占めていた。その他自由記載されていた内容は表12のとおりであった。

その他の本学に対する要望は表13の通りであった。

表8 本学に望む支援内容

n=126		
項 目	(人)	(%)
施設利用	56	44.4
研修	45	35.7
卒業生間の交流	29	23.0
教員との交流	28	22.2
ホームページ	21	16.7
在学生との交流	10	7.9
その他	3	2.4
就職についての相談(2)		
カウンセリングが受けられる		
(複数回答)		

表9 施設利用に関する要望

施設利用に対する要望(自由記載)		n=13 記入数
貸し出し期間の延長	圖書の貸し出し期間の延長	4
利用時間の延長	休日も午前中だけでも開いているとありがたい。	1
利用時間の拡大	利用時間の拡大	2
手続きの簡素化	前日までの電話連絡ではなく、自由に使えるようにして欲しい。	5
サービスの拡大	カードがなくても利用できるシステム。PCでID入力など	1
	症例研究等で図書館を利用したい。	1
	卒業生でも研究の取りよせができるようにしてほしい。	1
利用方法の合理化	コピーの現金利用が出来ると良い。	1
	より使いやすいように用紙等購入しなくてもよいように。	1
	図書館の研究的な使用におけるガイドラインの整備	1
		18 (複数回答)

表 10 希望する研修内容

研修内容	n=45	
	(人)	(%)
カウンセリング	17	34.0
看護研究	8	16.0
情報処理	6	12.0
事例研究	6	12.0
教育	5	10.0
教養	3	6.0
最新の知識・技術	1	2.0
看護管理	1	2.0
その他	3	6.0
合計	50	100.0

(複数回答)

表 11 ホームページの掲載内容に対する要望

内 容	n=126	
	(人)	(%)
教員の相談	44	34.9
本学の動向	38	30.2
同窓会	31	24.6
学生生活	15	11.9
その他	7	5.6
図書館情報 教員の募集など		

(複数回答)

表 12 その他研修に対する要望

研修に対する要望(自由記載)	記入数
いずれ復職したいが不安、何か受講し続けて自信がもてるようになりたい	3
研究に対する助言や指導、統計処理への指導	2
定期的に短大で研修を開催する(情報交換、モチベーションアップ)	2
病態生理や薬理の講義を今受けられたらおもしろいし身につくだろうと思う	2
通信制での研修(地方からも利用できるように)	1
行事と抱き合わせて研修を開催する	1
学生指導に関すること	1
合計	12

表 13 その他本学への要望 (自由記載)

本学への要望		n=15
学術的支援(7)	<p>Nsの継続教育の困難さを痛感。特に、専門科に対する深い知識、加えて専門外である科に対する一般的な知識の修得。これらをサポートして頂き、専門の先生方と事例検討ができれば、うれしい。ぜひお願い致します！</p> <p>看護師向けのセミナーをしていること、知らなかった。HPで見えます。今後セミナーや講演会等あれば参加したい。</p> <p>研修や講演等案内があれば、参加する意欲も出るのでは。今後も看護師として働いていくうえで、何かサポート的なものがあれば、嬉しい。</p> <p>遠く研修等があっても行けない。職場などでもたくさんの研修があるので、「学校」としてのオリジナルな内容のものでないと卒業生の参加は難しい？と感じる。</p> <p>図書館の本をかりたり、自由に使えるとありがたいです。(看研で苦戦しております) 2</p> <p>図書館を利用したいと強く思っている、自宅から遠いのでなかなか行けない。</p>	
キャリア支援(2)	<p>転職など就職の情報提供があれば嬉しいです。</p> <p>ママの復職サポートがあると大変うれしいなと思いました。しかも子連れOKで。</p>	
変わらずにいて(2)	<p>夏休みや春休みが長くて、とてもいい学校だなと思っていた。今後もそのままがいい。</p> <p>アルバイトや遊びに行くこと等、学生でないと出来ないことを体験することがとても大切だと思う。勉強のみならずそういった経験が後々の看護に活かされると、働いて強く感じる。</p>	
教員との繋がり(1)	短大卒業7年目にして、元教員より雑誌に論文を載せる機会を頂き、先生と出会うことのできた短大にとっても感謝。	
同窓会調査(1)	こういった取り組みはとても素晴らしい。頑張ってください。	
近況情報(1)	卒業生や在学生の近況が分かるような同窓会の会報とかがあれば良い。ホームページとかでもOK	

5. 役割受容度

役割受容尺度は図 1 のとおりで、役割有能感（果たすべき役割を遂行する能力や自信）が 2.8 と低値を示した。また役割受容尺度の 4 項目と、卒業後経過年数や年齢との相関関係は表 14 のとおりであった。役割受容尺度においては、相互の尺度間において 1% 水準で正の相関が認められた。役割満足（自分の生き方、生活に対する満足感）は卒業後経過年

数と 5 % 水準で正の相関（ $r=.22$ ）が、役割評価（自分の生き方や役割に対する肯定的な評価）は年齢と 5 % 水準で正の相関（ $r=.19$ ）が、役割有能感（卒業後経過年数（ $r=.25$ ）、年齢（ $r=.24$ ）と 1 % 水準で正の相関が認められた。役割達成感（自分の果たすべき役割の他にも様々な役割を積極的にこなしていく）は卒業後経過年数および年齢共に相関はみられなかった。

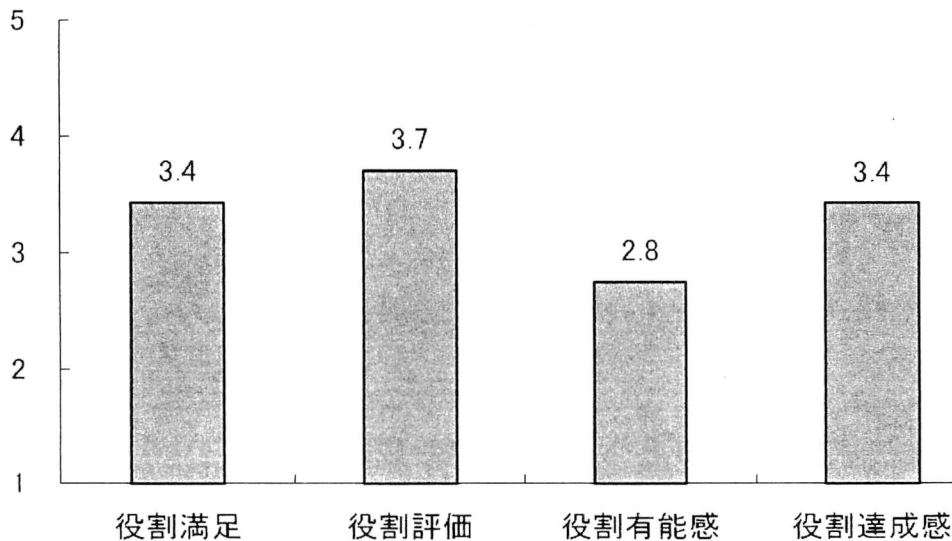


図 1 役割受容度（下位尺度）平均値

表 14 役割受容度（下位尺度）と卒業後経過年数、年齢との相関係数

	役割満足	役割評価	役割有能感	役割達成感	卒業後経過年数	年齢
役割満足						
役割評価	0.64**					
役割有能感	0.56**	0.69**				
役割達成感	0.49**	0.48**	0.62**			
卒業後経過年数	0.22*	0.17	0.25**	0.13		
年齢	0.14	0.19*	0.24**	0.12	0.71**	

相関係数
(Spearman)

** 相関は、1 % 水準で有意（両側）
* 相関は、5 % 水準で有意（両側）

VI. 考察

1. 学習ニーズについて

卒業生のニーズとして、学習環境としての施設の開放に関するものが高かった。最も多かったのが図書館の利用の拡大と利用手続きの簡素化を求めるものであった。特に専門書に関する閲覧や貸し出しの希望が多く見られていた。また看護研究にとって文献検索は重要なことであり、文献取り寄せのサービスの希望もみられていることから、今後検討の必要性を実感した。

次に多かったのは「研修」であり、具体的な内容としては「カウンセリング」が最も多かった。本学では平成19年度より夜間看護セミナーを開始し、特に「カウンセリング」に関する内容を実施しており、卒業生も何人か受講している。更に同窓会を通してセミナー等の周知をはかっていきたいと考えている。

また「看護研究支援」の要望も多いことから今後研究に対する支援方法を考えていきたい。また少数ではあるが、再就職に関する支援に対するニーズも認められた。再就職のための知識や技術の再習得だけでなく、キャリア教育としての視点でのプログラムのあり方を検討する必要があるだろう。

いずれにしても約60%が本学からの所要時間が1時間以上を要することから、本学に直接来て指導や教育を受けるという事は困難であり、今後ホームページなど電子メディアを利用した手法を更に充実させていく必要がある。しかし実際にはアンケート結果からもホームページを見る者は約40%に止まっており、本学に望む支援もホームページに関するものは16.7%と低値であった。その要因としてはホームページの活用範囲が限られていること、更新が少なく見る機会が少なくなっている事が考えられる。学生のうちから電子メディアを利用する機会を多く要する内容に変えていくことで、卒業後も引き続き利用する機会を作ることが必要である。また卒業生からの声を聞くといった取り組みも開始しており、双方向性の発信を更に図っていく必要がある。

2. 役割受容度

本学卒業生の役割受容度を測定した結果、「役割受容尺度」のうち「役割有能感」が低値を示したが、三川³⁾が実施した20歳代女性に対する調査結果では、「役割有能感」は2.8であり、本学卒業生と一致した結果であった。また同調査の20歳代女性では「役割満足」3.2、「役割評価」3.3であった

が、本学卒業生は「役割満足」3.4、「役割評価」3.7で一般の20歳代女性より高値を示していた。一方同調査の20歳代女性では「役割達成感」は3.6で、本学卒業生は3.4とやや低値を示していた。統計学上の比較はできないが、一般の20歳代女性と比べ「役割評価」と「役割満足」が高く、自分の生き方や役割に対してより肯定的であり、満足しているという特徴が伺えた。

また、「役割有能感」は年齢や卒業後経過年数とやや相関が認められており、経験によって高くなっていくと考えられる。今回「役割有能感」が低くなっている要因として、本学の卒業生は比較的若い年代であり、臨床経験等の経験が浅い集団であることが一つの要因であると考えられる。

教員の成長を研究している秋田⁴⁾は教師が真に成長していくためには、大工場のようなプログラム化された仕事をともに行っていくのではなく、検討を望む課題に対してその時々に応じて共に学び、研究しあうという同僚性が重要であると述べている。それは学校内外を問わずお互いの専門性を認めあって行われるインフォーマルな対話が重要であるとも言っている。つまりインフォーマルな対話をとおしでの経験の分かち合いが重要であり、自己の経験に意味を見だし、その積み重ねをとおして役割の有能感に結びついていくと考えられる。このことは教員だけでなく看護師の成長にも通じることであると考えられる。職場を離れて教員、卒業生、在学生など様々な人々との交流や学習の場を持つことは、卒業生にとって成長を促し、また有能感を育む基盤にもなると考えられる。本学としては研修会や学習会の実施には限界があるが、さまざまな出会いのある環境を提供していく必要がある。

VII. 結論

本学卒業生にアンケートを実施した結果以下のことが明らかになった。

1. 卒業生のニーズは、最も多かったものは図書館の拡大と利用手続きの簡素化を求めるものであった(44.4%)。また「看護研究支援」の要望も多い(40.8%)ことから、今後支援方法を考えていきたい。「研修」も次いで希望が多く(35.7%)、具体的な内容としては「カウンセリング」が最も多かった。また少数ではあるが、再就職に関する支援に対するニーズも認められ、様々な卒業生のニーズに応えていく必要が

ある。

2. 「役割受容尺度」のうち「役割有能感」が低値を示し、果たすべき役割を遂行する能力や自信がやや欠如している傾向が伺えた。役割有能感は年齢や卒業後経過経験年数と相関が認められ、今後様々な経験を通し、その意味を見出していくことで高まると考えられる。
3. 本学の支援対策としては、図書利用の拡大や手続きの簡素化、看護研究支援、再就職等も含んだキャリア発達支援が挙げられる。卒業生は、自分の生き方や役割に対して比較的肯定的であり、満足していたが、様々な経験の意味付けをする「場」として在校生、卒業生、教員等と交流する環境を整えていくことが必要と考える。更に遠方居住者が多いことから、ホームページなどの活用も検討していく必要がある。

おわりに

今回、本学の卒業生に対して役割受容度および学習ニーズに関する調査を実施したが、卒業生は多くの支援や情報提供を期待していることが明らかになった。本学としては卒業生に対する指導や教育には限界もある。直接的な卒業生への支援というより、在学生を中心にし、その教育に卒業生が参画できるようなプログラムを企画していくことが有効だと考えられる。そこから相互の学習や成長に繋がり、やがて「役割有能感」の促進にも結びつくものと考ええる。いずれにしても卒業生の活躍が学校の発展でもある。今後更に卒業生への支援を模索していきたい。

謝 辞

本調査にご協力いただきました川崎市立看護短期大学卒業生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 三川俊樹. 成人期における役割特徴と役割受容. 追手門学院大学文学部紀要. Vol.22, 1988, p.1-22.
- 2) 堀洋道監修. 吉田富二雄編. 心理測定尺度集Ⅱ. サイエンス社, 2001, p.297-302.
- 3) 三川俊樹. ライフ・キャリアの視点からみた役割受容, The Japanese Society for the study of Career Education. 1990, Vol.11, p.10-17.
- 4) 秋田喜代美. 教員としての成長を支援するために必要な視点とシステム, 看護教育, 1998, p.278-283.